

沖縄の大学における法教育

—教室における文化的多様性の尊重と不偏観察者の意義—

高崎理子（中央大学大学院博士後期課程）

1. 問題意識

ディスカッションやディベートは、学生の論理的思考力およびプレゼンテーション能力の養成に有効である反面、扱うテーマによっては教室に思わぬ感情的対立を生む危険性がある。しかし、大学は、多くの学生の人生にとって最後に通う学校であり、生涯の友や良き仲間との出会いが期待される場所でもある。このことを考えると、友情の芽を摘んでしまうほど白熱した討論は望ましいものとは思われない。特に、沖縄の大学生は、出身地が沖縄本島はじめ宮古島や石垣島等の離島地域、関西地方、北海道など様々であり、両親もしくは片方の親が外国人である場合や本人が外国籍を有する場合も少なくない。

このように多種多様なバックグラウンドをもつ学生から構成される教室で法教育を行う際、いかなる工夫が効果的であるか。

2. 方法

不偏観察者、すなわち公平で中立的な存在は、様々な論点について異なる立場をとる学生が安心して発言できるよう促す効果があるだけでなく、議論が過度に白熱することを防ぐ力もあると思われる。こうした存在を教室に生み出す方法について、沖縄県立芸術大学、沖縄キリスト教学院大学および同短期大学における授業実践（「日本国憲法」「国際法」「国際人権論」）をもとに考察する。

- (1) 教師：自らの意見を最初から強く打ち出すことを差し控える。
- (2) 聴衆：トーナメント方式のグループ・ディスカッションではなく、各グループの代表者が教壇に集まってディスカッションを行い、それを他の学生たちが中立的な立場で聞いて判断する。
- (3) 架空の国：ディスカッションの際、一つのグループだけは討論に加わず、地球外の惑星にある架空の平和愛好国に所属してもらう。その国の人々は、地球に対する領土的野心や法的知識を持たず、ただ地球全体の平和と人間たちの幸せを願っているという設定にする。そして、彼らは、討論の最終段階で皆の前に登場し、今後の解決策を含めた意見を述べる。

3. 今後の課題

文化的に様々な背景を有する学生から構成される教室においては、1対1の対立構造よりもむしろ中立的な第三者が存在した方が、アクティブ・ラーニングの質を向上させることがわかった。特に、三番目の方法については予想以上の効果が認められた。不偏観察者たる王国の人々が登場すると教室の雰囲気が一変して和やかになり、あらゆる立場の論者がその意見を敬聴した。

時には、彼らの提案内容が、現実的な実現可能性の低い理想論に感じられることもある。しかし、それを直ちに常識論で否定するのではなく、法的な実現方法について提示できるようになることが、教師にとっての今後の課題であると考えている。